

小学校教員の泳力別にみた水泳指導に対する困難度

Relationship between Teachers' Swimming Ability and Difficulty for Teaching Their Students

野村東子¹⁾・春日晃章²⁾・熊谷佳代²⁾・宇野嘉朗¹⁾・小椋優作²⁾

Haruko NOMURA¹⁾, Kosho KASUGA²⁾, Kayo KUMAGAI²⁾

Yoshiro UNO¹⁾ and Yusaku OGURA²⁾

1) 岐阜大学大学院教育学研究科

Graduate School of Education, Gifu University

2) 岐阜大学教育学部保健体育講座

Department of Physical Education, Faculty of Education, Gifu University

Abstract

The swim in the elementary school is one of the main units in the school physical education of Japan. However, the teacher has worry in guidance for the way of the breath, the paddle and the kick. It thinks that teacher's swimming ability might be related as one of the causes. The purpose of this research was to have clarified the relation between the teacher's swimming ability and difficulty feeling in guidance. The answer was obtained from 162 people as a result of investigating by the questionnaire for the teacher at the elementary school in the Gifu prefecture. Teacher's swim ability was classified into four groups "Group that was able hardly to swim: G1", "Group that was able to swim by about 25m: G2", "Group that was able to swim by about 50m: G3" and "Group that was able to swim by 100m or more: G4" and it analyzed. To conduct a statistical analysis of the date, one-way ANOVA and multiple comparisons (Tukey' HSD test) were employed. Statistical analysis showed a significant difference among G2-G3 and G2-G4 at the difficulty feeling in guidance of crawl. G2 felt the difficulty in guidance by both. It felt more difficult than G3 and G4 in guidance as well as G2 though a significant difference was not showed for G1. On the other hand, a significant difference was not showed at the level of the difficulty feeling in guidance of the breast stroke. It is a factor to feel the difficulty in guidance that the teacher cannot swim in the elementary school. The difficulty feeling in guidance can be reduced by come to being able to swim at least 50m.

キーワード：小学校教員 水泳授業

Key words : teachers of elementary school, class of swim

I. 緒言

平成19年度実施の教員採用選考試験¹⁾において東京都と愛知県が水泳の実技試験を廃止して以来、同様に廃止する都道府県や市の割合が増加している。この理由としては、受験生のほとんどが各教育委員会の定める泳力水準を充たしていること、複数の教員で水泳の授業をする学校

が多く、指導や安全は確保できること、泳力以上に試験を課す必要のある内容があること、および教員採用試験の時間等の理由が挙げられている²⁾。これらのことから今後はますます水泳の実技試験を廃止する都道府県が増加し、教員の泳力低下やそれに伴う指導力不足が懸念される。植屋・孫³⁾は、教師としてのモラルや行動に問題

はないとしても、指導すべき教材に関して指導力不足である教員が多いと述べている。永木ら⁴⁾は、教師が自己の実技力を磨き、そのプロセスの中で培ったいわば身体知というべきものを子どもに発する時、教師と子どもの教育関係が成立すると述べている。これらのことから、教員に一定の泳力がなければ、水泳の指導に影響を及ぼすことが予想される。しかしどの程度の泳力を必要とするのかはあまり検討されていない。そこで本研究は小学校教員の泳力と水泳指導に対する困難度との関連を検討することを主たる目的とした。

II. 方法

1. 対象者

本研究の対象は岐阜県内の小学校8校に勤務する教員162名（男性60名、女性99名、無回答3名）であった。

2. 調査項目および方法

調査項目は教員の泳力、指導に対する困難度、困難感を抱く内容の3つであった。教員の泳力については、クロールおよび平泳ぎそれぞれについて、“ほとんど泳げない”、“25m程度泳げる”、“50m程度泳げる”、“100m程度泳げる”、“それ以上”の中から自己の泳力に最も近いものを、指導に対する困難度については、“とても感じる”、“比較的感じる”、“あまり感じない”、“全く感じない”の中から自己の感じ方に最も近いものをそれぞれ選択させた。困難感を抱く内容については、クロールおよび平泳ぎそれぞれについて、“けのび”、“手のかき方”、“キックのしかた”、“息継ぎのしかた”、“手と足のタイミング”、“その他（自由表記）”の中から当てはまる項目全てを選択させた。なお、本調査の回収率は77.1%であった。

3. 統計処理

指導に対する困難度は、「とても感じる」（4点）、「比較的感じる」（3点）、「あまり感じない」（2点）、「全く感じない」（1点）として得点化し、泳力群別の違いを検討するため一要因分散分析を適用し、有意な差が認められた場合には多重比較検定（TukeyのHSD法）を行った。困難と感じる内容については各項目について「感

じる」（1点）「感じない」（0点）として得点化し、泳力群別の違いを検討するために χ^2 乗検定を適用し、有意な差が認められた場合には残差分析を行った。なお、本研究における統計的有意水準は5%未満であった。

III. 結果および考察

教員のクロールおよび平泳ぎの泳力は、図1、2のようであった。分析では教員の泳力について「ほとんど泳げない群」、「25m程度泳げる群」、「50m程度泳げる群」、「100m以上泳げる群」と泳力ごとに分類して分析した。

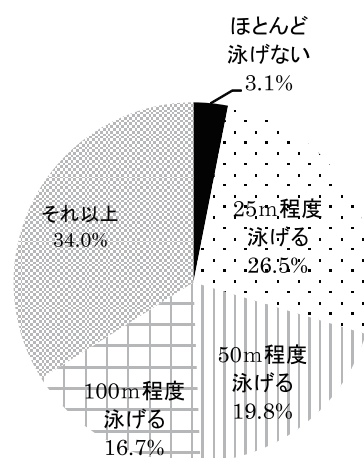


図1 教員の泳力（クロール）

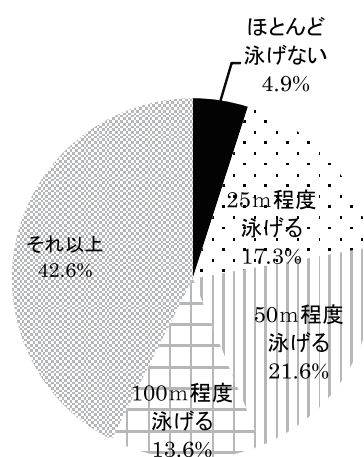


図2 教員の泳力（平泳ぎ）

クロールの泳力別にみた指導に対する困難度は図3のようであった。25m程度泳げる群と50m程度泳げる群および100m以上泳げる群の間に有意な差が認められ、25m程度泳げる群の困難

度が高かった。また、ほとんど泳げない群において有意な差は認められなかったものの困難度は4群の中で最も高かった。これらのことから、50m以上泳げる教員は指導に対する困難度が有意に低いこと、泳力が高い教員ほど困難度が低くなることが明らかとなり、50m以上の泳力を持つことが困難度を低くするひとつの基準になると示唆された。

平泳ぎの泳力別にみた指導に対する困難度は図4のようであった。平泳ぎに関してはどの群間も有意な差は認められなかったものの($p=0.78$)、泳力が高いほど、指導に対する困難度が低くなった。浅見⁵⁾らは、受講生たちが授業を担当する時、模範演技ができるかどうかの自信の有無を左右すると述べている。また、木村⁶⁾は、教員が水泳指導に困難感を抱く理由として、指導方法がわからないことや運動技能に自信がないことを挙げている。取得免許ごとに困難感を抱く理由を調査した結果、体育の免許取得者(体免取得者)の方が他教科の免許取得者(他免許取得者)よりも困難感が低かった。また、泳力は体免取得者は全員が25m以上泳げるのに対し、他免許取得者はクロールでは55.4%、平泳ぎでは51.6%の教員が全く泳げない教員も含め泳力10m以下であったことから、他免許取得者が指導しにくいとするのは水泳技能の有無から見ても当然であるとも述べている。これらのことから教員が泳げることは水泳指導で困難感を低くすることや、水泳授業を行うことへの自信を持たせるために重要な条件であると考えられる。小学校学習指導要領⁷⁾では25mから50m程度泳げることが児童の達成目標であり、より良い指導のためには威光を放つ実技力(成功したもの、素晴らしいもの)が教員にとって必要であることから、教師はそれぞれの泳法について50m以上の泳力を身に付けることが重要であると推察される。

クロールと平泳ぎの困難度を比較すると、すべての群において平泳ぎの方が高く、100m以上泳げると回答した教員でも比較的難しく感じていた。平泳ぎは現在のクロール泳法を形作る元となる泳法であり、制限の多い特殊種目であると佐藤は述べている⁸⁾。クロールと平泳ぎを比較

すると、クロールの方がより効率的に、より速く泳ぐことを目的として改良された泳ぎである。このことから、クロールの方が泳ぎやすい泳法であり、教師の立場からも児童を泳げるようにさせやすく、指導に対する困難度が平泳ぎよりも低かったのだと考えられる。

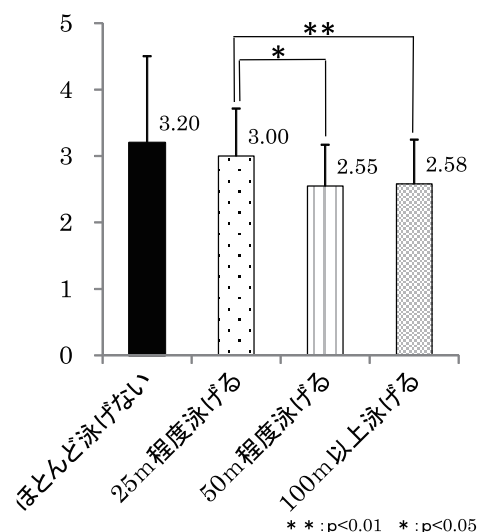


図3 泳力別にみた困難度(クロール)

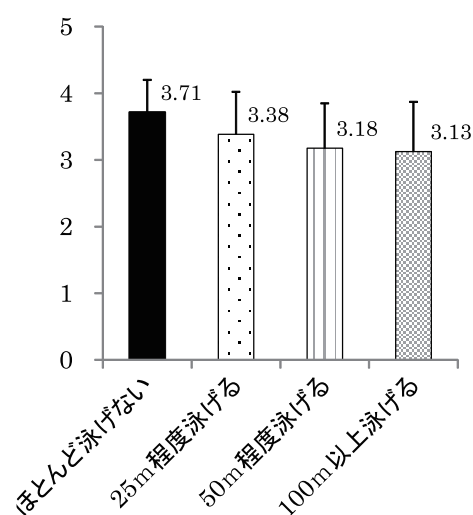


図4 泳力別にみた困難度(平泳ぎ)

困難感を抱く内容について、教員の傾向は図5、6のようであった。 χ^2 乗検定の結果、クロールにおいては手と足のタイミングに有意な差が認められ、25m程度泳げる群は困難度が有意に高く、50m程度泳げる群および100m以上泳げる群は困難度が有意に低かった。平泳ぎにお

いては、手のまわし方に有意な差が認められ、ほとんど泳げない群および25m程度泳げる群は困難度が有意に高く、100m以上泳げる群は困難度が有意に低かった。泳いで進む際に重要視されていることは、クロールでは手の動作、呼吸動作およびキック動作、平泳ぎでは手の動作、手と足の協応性であるが⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾、実際にはクロールにおける手と足の協応性や平泳ぎにおける手の動作も推進力を得るために重要な要素である¹²⁾¹³⁾。しかし、後者は重要でありながら他の要

素と比較すると重要度は低く、指導においては優先順位が低くなりがちと考えられる。したがって、重要度が高い要素においてはどの教員も一様に困難度を抱くために、指導法が多く示されているが、その他の指導法があまり示されていない要素においては、教師の実技力や経験が困難度の差として現れたのではないかと考える。

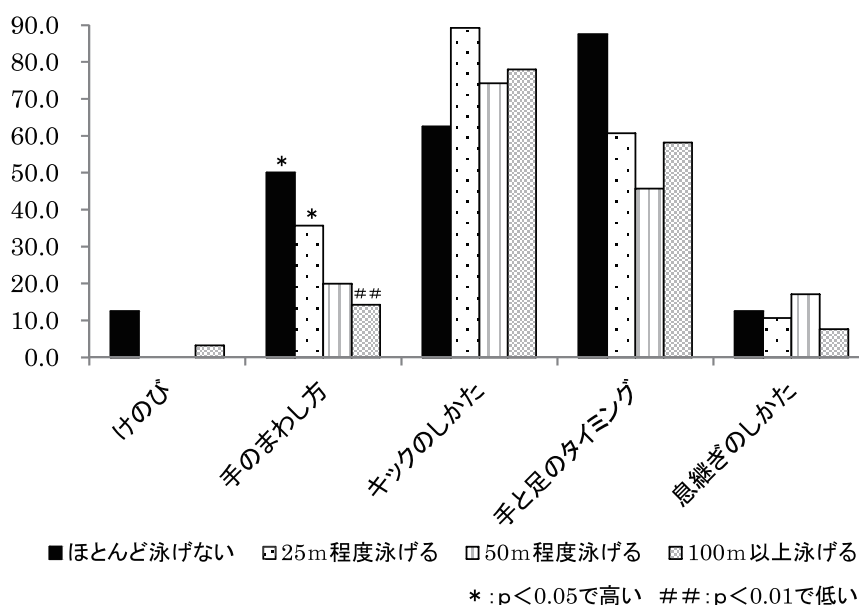


図5 クロール指導における困難感を抱く内容

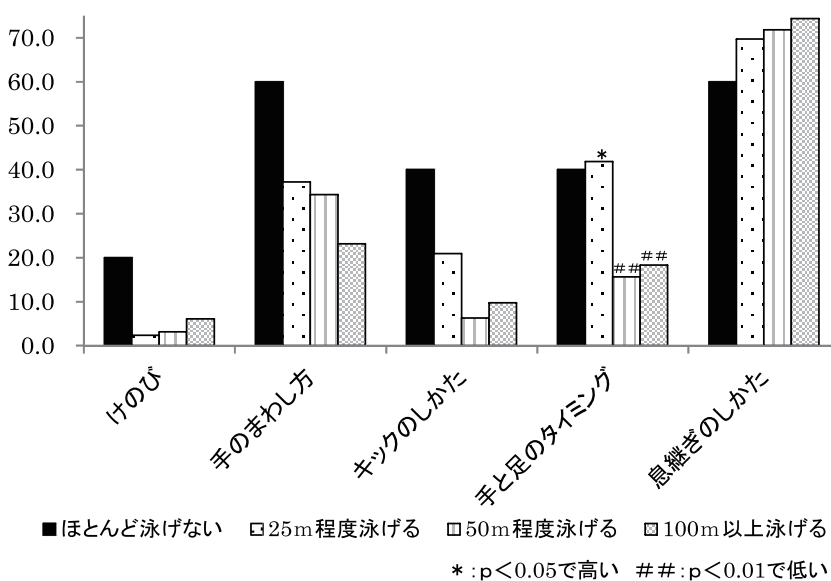


図6 平泳ぎ指導における困難感を抱く内容

IV. まとめ

泳力が高くなるほど指導に対する困難度は低くなること、クロール指導に関しては50m以上泳げることが困難度を低くするひとつの要因となっていること、平泳ぎ指導はクロール指導よりも困難度が高かった。よって小学校教員は50m以上泳げるようになることが望ましく、また平泳ぎの指導方法を特に現場に示す必要があると考えられる。また、困難感を抱く指導内容に関して、指導法があまり示されていない要素の指導は、教師の実技力や経験が重要であることから水泳指導において教員自身が泳法を身につけることや、教員養成課程で実技力が身につくよう授業を充実させる必要があると考えられる。

V. 引用・参考文献

- 1) 文部科学省（2009）公立学校教員採用選考試験の実施状況
- 2) 広島県教育委員会（2012）「平成25年度広島県・広島市公立学校教員採用候補者選考試験」について
- 3) 植屋清見，孫大鵬（2006）「指導力不足教師」を生み出したいくないと願う大学教育の指導のあり方ー本学初等体育科教育（陸上運動）の授業実践を例としてー，教育実践学研究 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要11，12-25
- 4) 永木耕介，寺岡敏郎，千駄忠志，山本忠志，森田啓之，高田俊也（1998）「体育」に求められる「教師の実技力」について～子どもの水泳指導実践にもとづいた身体論的アプローチから～，実技教育研究12，57-63
- 5) 浅見裕（1986）教育学部学生が持つ体育指導の自信について，教育工学研究 8，11-36
- 6) 木一郎，阿部正臣，梶原洋子，穂田 清，野崎忠信（1978）小学校助教諭の体力・技術と教科体育への意識，日本体育学会大会号29，338
- 7) 文部科学省（2010）小学校学習指導要領
- 8) 佐藤裕（2013）言語ゲームと志向性～社会的観点から～，富山大学人文学部紀要59，1-33
- 9) 合屋十四秋，天野義裕，米田吉孝（1984）水中エレクトロゴニオメーターによるクロール泳のプル動作の解明，日本バイオメカニクス学会大会論集，174-180
- 10) 鎌田安久，栗林徹，山下芳男，北田雅子（1995）水泳におけるプルの能力と泳力，岩手大学教育学部研究年報54，89-102
- 11) 早川謙一（1977）平泳ぎの腕の動きと将来の平泳ぎ，福島大学教育学部論集 教育・心理29，41-53
- 12) 井芹武二郎（1991）平泳ぎ泳法の指導に，北海道大学教育学部紀要55，187-205
- 13) 宮畑虎彦（1979）クロールのスピードと手・足の協応，日本体育学会大会号30，557

